

2018 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	准教授	小島 正憲
最終学歴	学 位	専門分野
日本体育大学体育科学研究科体育科学専攻 博士前期課程	修士 (体育科学)	体育科教育（器械運動）、 運動学、バイオメカニクス

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

本学における「三つの言葉」(建学の精神／校訓／教職員の心構え)を念頭に置き、学生指導に従事する。具体的には、担当する授業(座学・実技・演習)すべてを含め「知的に楽しく学ぶ場」として捉え、指導していく。また、授業を通して「生きる力」を育て、社会性の高い教員やスポーツ指導者を目指す学生を育成していく。

(計画)

2017 年度に引き続き、担当する授業のなかで自己啓発の話をする(以下、話とする)。私の経験から、学生は自己啓発類の話をするに興味津々の面持ちで耳を傾けてくれるため、その状況を積極的に利用し、学生教育の一環として用いる。具体的な方法として、授業の節目に(3/15回)ちょっといい話と題して5分程度の話をする事で、学生との距離を縮め、学生生活に何らかの刺激を与えたいと考えている。

授業評価(FD アンケート)については、満足のできる高い評価を得られた。一例として、「設問2:総合的に判断して、この授業に満足できましたか」における学生の評価は4.5と高い数値であった。またその結果より、全学FD研究会において授業実践優秀教員として表彰して頂き、心より感謝している。今年度の授業においても初心を忘れず、引き続き学生が満足できる授業内容と、学生の教養を高められる授業をしていく。

○担当科目(前期・後期)

(前期) 専門スポーツ実習(器械運動)、保健体育教育法Ⅰ、バイオメカニクス、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期) 教職実践演習、健康・スポーツ実習、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

担当授業の演習及び実技全般において、コミュニケーション能力を向上させるためにグループワークを積極的に取り入れた。そのことで授業にまとまりができ、教員側としても非常に授業が運営しやすくなった。また、主に演習の事であるが「私の1週間の出来事」と題して、授業のはじめに一人1分から3分間程度の自己プレゼンテーションを実施し、人前で話すことを習慣化させた。結果として、学生の様子から個人差はあるものの自己プレゼンテーション能力に成長が見られたため、今後はレベルアップし、就職の面接に対応できるような内容と形式に変化させていく。

○作成した教科書・教材

専門スポーツ実習(器械運動)及び教職実践演習において、振り返りの質を向上させるための評価票(リフレクションシート)を作成した。そのことで、充実した授業の振り返りができたと考える。

○自己評価

私自身、納得のできる授業であったと考えている。特に一判断材料となる授業評価（FD アンケート）からは、満足のできる高い評価が得られた。例として、専門スポーツ実習（器械運動）から高評価ベスト 3 を挙げると、「設問 10：教員の意欲や熱意が感じられましたか（4.9pt）」、「設問 3：この授業内容について理解できましたか（4.8pt）」、「設問 8：教員の声や話し方は聞き取りやすかったですか（4.8pt）」であった。

II 研究活動

○研究課題

器械運動における技の指導法について

○目標・計画

（目標）

バイオメカニクス及び運動学の手法を用いて、器械運動における技の外発的・内発的（コツ・カン）に起こる現象を解明することにより、技の本質的理解を深め、体育の現場指導に寄与することを目指す。現在の主な研究テーマとして、指導が難しいとされる「倒立の指導法」に焦点を当てた研究を進めている。

（計画）

研究日や夏季・春季休暇期間を利用して、研究活動を行う。具体的には、学会・講習会等へ積極的に足を運び、見識を広げつつ年 1 回以上の学会発表及び 1 本以上の論文投稿をする。また、自身が担当する授業（専門スポーツ実習：器械運動）から実態調査アンケートや教材ノートをつくり、内発的調査をすることで授業に反映させる。

○2011 年 4 月から 2019 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（学術論文）

- ・橘廣、長谷川望、小島正憲『「教職実践演習」を中心とした教職科目の検討：アクティブラーニングの視点から』東邦学誌第 46 巻第 1 号、2017 年、103 頁～118 頁
- ・小島正憲『倒立姿勢の「腰が反る」動作を改善するための事例的研究－マット運動から－』東邦学誌第 46 巻第 2 号、2017 年、79 頁～92 頁
- ・小島正憲『マット運動における指導法の一考察－マット運動【倒立編】－』東邦学誌第 45 巻第 2 号、2016 年、1 頁～14 頁
- ・小島正憲『マット運動における授業方法の一考察－学生のアンケート調査から－』東海学院大学紀要第 9 号、2015 年、137 頁～144 頁
- ・齋藤義雄、小島正憲、長瀬啓子、安藤雅夫、川崎億子『学科で取り組むカリキュラム改善』東海学院大学紀要第 9 号、2015 年、145 頁～162 頁
- ・小島正憲『音楽がスポーツパフォーマンスに与える影響－事例的論文の検証による今後の展望－』東海学院大学紀要第 8 号、2014 年、217 頁～224 頁
- ・小島正憲『大学授業における倒立前転の実態調査－自己評価票の理解度と完成度からみた授業効果－』東海学院大学紀要第 8 号、2014 年、225 頁～230 頁

（学会発表）

- ・小島正憲『マット運動における倒立の指導法について－新たな指導法「ヤジロベエの導入」－』第 65 回東海体育学会、2017 年、皇學館大学（三重県伊勢市）、口頭発表
- ・小島正憲、木野村嘉則、葛原憲治『初心者倒立における評価指標の提案－体育授業における倒立運動の評価を目指して－』第 68 回日本体育学会、2017 年、静岡大学静岡キャンパス、ポスター発表

- ・小島正憲『音楽が体育実技に与える心理的作用－学生を対象としたアンケート調査－』第 64 回東海体育学会、2016 年、名古屋学院大学名古屋キャンパス白鳥学舎、口頭発表
- ・小島正憲『音楽がスポーツパフォーマンスに与える影響－体育実技の授業から－』第 63 回東海体育学会、2015 年、愛知県立大学長久手キャンパス、口頭発表

(その他)

- ・小島正憲『大学生における体力テストの調査報告』東邦学誌第 46 巻第 1 号、2017 年、155 頁～160 頁、研究報告
- ・小島正憲『大学授業における体力テストの調査報告』東海学院大学研究年報第 1 号、2016 年、91 頁～98 頁、研究ノート
- ・小島正憲『大学生における生活実態の調査報告－教員を目指す学生を対象として－』東海学院大学研究年報第 1 号、2016 年、99 頁～106 頁、研究ノート
- ・小島正憲『音楽が体育授業に与える影響－学生を対象としたアンケート調査－』東海学院大学紀要第 9 号、2015 年、231 頁～235 頁、研究ノート

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

2019 年度の科学研究費へ申請中

○所属学会

日本体育学会（体育科教育学、コーチング学、バイオメカニクス）、スポーツ運動学会、スポーツパフォーマンス学会、体操競技・器械運動学会、日本発育発達学会、日本幼児体育学会

○自己評価

2018 年度の研究目標に、「年に 1 本以上、学術論文を投稿する」及び「年 1 回以上、学会発表をする」と掲げていた。残念ながらその目標は達成できておらず、論文の投稿については今年度 3 月末日を目指して執筆中であるが、学会発表については目標を達成できていない。その理由として、私が例年発表している東海体育学会であるが、今年度は本学で開催され、ホスト校としての業務が多く発生したため、発表することができなかった。その反省を踏まえ、来年度は積極的に研究活動を行う。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

2018 年度は、「教職課程再課程委員、教職センター委員、中・高教職課程委員」に配属された。その配属先から、教職に関わる委員会が多いため、最も力を入れるべきことは教員を育成することであろうと考える。そのため、教職を目指す学生には教員の魅力を熱く伝えることで教員志望者を増やし、東邦ステップ（教員コース）と連携しつつ、教員採用試験対策の充実も図りたい。また、教職に関わらない学生においても時代のニーズに沿った、将来（就職）に繋がる指導をしていきたい。

(計画)

2018 年度で着任 3 年目を迎え、少しずつ学内の環境（授業・校務・研究体制・委員会活動等）に慣れてきたため、人間健康学部の教員として少しでもリーダーシップを発揮しつつ、与えられた使命と役割を全うしていきたい。

○学内委員等

自己点検・評価委員会委員、教職課程再課程認定委員会委員、教職支援センター運営委員会委員、中高教職課程委員会委員、TOHO アルティメットクラブ顧問

○自己評価

着任3年目の2018年度は、昨年度と比較すると意見等を含め積極的に委員会活動に従事できたものと考えている。そのため、自己評価としては満足できる1年であった。2019年度も引き続き、委員会活動に従事しつつ、補助的ではなく主要的（リーダーシップ）な活動ができるよう努力していく。

IV 社会貢献

○目標・計画

（目標）

体操競技の元選手及びプロコーチとして培ってきた経験を、子どもたちに伝えていきたいと考えている。特段、今年度もお話を頂いた「子ども大学にっしん」（愛知東邦大学連携事業）に力を注ぎ、子どもたちが楽しく学べるような器械運動の指導とプログラムにしていきたいと考えている。また、年齢問わず積極的にスポーツや、体を動かすことの重要性を伝えていきたいと考えているため、本学園と連携する何らかのスポーツイベントを模索していきたい。

（計画）

大学が運営する公開講座・カレッジスクール・大学祭などの催事に、何かスポーツに関わる講義・教室のできる場を設けたい。

○学会活動等

- ・日本幼児体育学会における指導者講習会のサポート
- ・第66回東海体育学会における運営（開催校）

○地域連携・社会貢献等

- ・子ども大学にっしん（愛知東邦大学連携事業）の体操教室
- ・ヘルピーストレッチの監修（愛知東邦大学連携事業）
- ・ATUCCの講座（体操教室）：10月27日及び11月11日
- ・愛知東邦大学地域スポーツクラブにおける体験教室（3月25日予定）

○自己評価

2018年度の社会貢献としては、充実していたと考えている。特に、東海体育学会においてはホスト校としての運営責務を果たし、子ども大学にっしん及びATUCCにおいては、体操教室を無事に終えることができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

特記事項なし

VI 総括

2018年度は、授業及び学生指導、社会貢献、各種委員会活動において積極的に取り組めたため、主観的であるが充実した1年であったと言える。しかし、研究分野においては自身の目標であった「年に1回以上の論文投稿及び学会発表」は、達成できていない。そのため2019年度は、研究に力を注ぐこととし、目標は科学研究費や研究助成金を獲得できるレベルの研究論文を執筆することである。また研究以外のこととして、各種校務をバランスよく行い、本学専任教員に恥じない姿勢で、何事も責任を持って取り組んでいく。

以 上